

分科会1 第2学年

内容項目：A-(1) 自主、自律、自由と責任

教材名：「あの子のランドセル」

授業者：尾道市立向東中学校 教諭 村上 友一

司会者：府中市立上下中学校 教諭 中野 公裕

記録者：世羅町立甲山中学校 教諭 沖 瑞紀

指導・助言：広島県東部教育事務所 指導主事 津森 佑平

1 授業について（授業者より）

授業全体を通して、生徒たちに助けられた授業であった。本学級の生徒の実態は、言われたことは言われた通りに行うことができるが、主体性が不十分に感じる。この実態を基に、責任ある行動とは何だろうかと考えてもらうため、生徒自身が分かりやすい教材を決定した。授業を振り返って、あの場面では、もっと生徒の意見を聞いてやればよかった、問い返しをすればよかったという後悔がある。さまざまな意見をいただき、これからの道徳の授業に生かしていきたい。

2 質疑応答

質問：夏季休業中の事前研修では、最後の発問で、「罪を犯してしまった時、その後どうするか」という場面を絞った発問であった。一方で、授業では、「自分の行動に責任を持つために大切にしたいことは何か」という一般化された発問であった。この変更在意図があったのか

回答：特に意図したわけではないが、12月上旬には生徒会の改選がある。学校行事との関係から、2年生が学校を引っ張っていかなければならない。そのため、幅広く物事も見てもらいたいという意図があり、変更した。

質問：生徒同士が問い返しをしながら対話を行う活動は、道徳科の授業では毎回やっているものなのか。また、このような対話は、道徳科の授業以外でも行っているのか。

回答：研究主任と相談をして主体的な学びを導き出すための「深めたいワード」を使用している。これは、生徒の机の裏側に貼らせているものである。道徳科の授業では、「深めたいワード」の

1番から6番までのどれかに絞り、取り入れるようにしている。本校では、道徳科の授業はもちろん、他の授業でも行っている。

他にも、毎週水曜日の朝のホームルーム15分間程度「対話タイム」を行っている。例えば、「人生最後に食べたいものは何か」など話題を設定し、「深めたいワード」の番号を指定し、ペアで会話を行う。生徒にとって難しい話題の場合は、教員が補助発問をしてやらなければいけないこともある。普段からの練習が大切で、まだ十分でないと感じている。



3 協議

意見：授業の最初に村上先生の私物のリュックを出したり、生徒にランドセルを持っているかを質問したりするなど、教材について自我関与させ、しっかりと考えさせる、良いきっかけになった。

意見：いじめをした女の子が責任取るという意見が出たが、もし自分であればどのように責任を取るかを考えさせたら、より生徒たちも深く考えることができると感じた。

意見：意見交流の中で、ワークシートを使ったり、全体交流ではホワイトボードを使ったりしていたが、必ず出てくるのが深めたいワードの「なぜ」であった。授業の中で、より主体的な場面であるように感じた。また、ホワイトボードと黒板と電子黒板の3つを使うことで、生徒の意見が書いてあるホワイトボードをすべて掲示するスペースをしっかりと取り、生徒の意見を残せるところが素晴らしいと感じた。共通点や相違点を、色や線の種類を変えて、マーキングをし、生徒にとって分かりやすいものだと感じた。

意見：最後に、振り返る時に自分の経験を振り返って、誰かに嫌な思いをさせた記憶などがある生徒がいると思う。その経験について振り返って、今の自分にできることを考える活動を取り入れても良いと思う。授業の最後にあった振り返りを交流する時間に、ある生徒が「自分がいつ、傷つける側になるかわからない」という発言をしていた。傷つける側の気持ちで最後振り返ると、より自分事として考えられたと感じた。

4 指導助言

本日の授業から学びたいよさを2点、今後に向けて1点を挙げる。

1点目は、「生徒に問題意識を持たせる導入の工夫」がされている点である。

本時の導入では、「友達から借りたシャープペンシルを壊してしまった」という架空の事例について、「謝罪し、似たものを買って返したら責任をとったことになるのか」を問われた。この質問に対して、3分の1の生徒が「なる」、3分の2の生徒が「ならない」と回答し、答えが一つに決まらない中で、テーマである「自分の行動に責任をもつとはどういうことだろうか」ということについて、一人一人が問題意識を持つことができるよう、工夫されていた。

導入において問題意識を持たせることは、生徒が道徳的価値を理解したり、物事を多面的・多角的に考えたり、自分の問題として受け止め自己を見つめるなど、本時の学びを深めることにつながる。生徒が自分事として考えられるよう、問題意識を持たせる工夫が大切である。

2点目は、「対話を通して考えを深めさせる手立て」である。

道徳科の授業においては、生徒がしっかりと課題に向き合い、教師や他の生徒との対話や討論なども行いつつ、内省し、自らの考えを深めていくプロセスが重要である。本時の中心発問では、「苦しんでいる『私』が考えていること」について、向東中学校の対話の重点項目「多面的・多角的に考えよう」を意識させ、意見をホワイトボードに整理させる活動があった。

生徒が話し合い、ホワイトボードに整理することで、共通点が視覚化されるとともに、少し違った視点の意見も見えてきた。

また、ホワイトボードに整理された内容を基に、聞きたいことについて、教師や別の生徒が問い返すことにより、自己とのかかわりを問い直す生徒の姿が見られた。

このように、生徒に話し合わせる際に、どのようなことを意識するかを伝えたり、視点を明確にした切り返しを行ったりすることで、生徒が「なぜ」「どうして」と自己や他者と対話することを促し、生徒が振り返り、価値観を見つめ直すことにつながる。

今後の授業改善に向けては、「道徳的価値を実現することの難しさ」について、道徳的価値の理解を深めていく過程でより実感を伴った理解としていくことである。

中学生になると、生徒は自らの長所や短所をある程度まで自覚するようになり、自分の弱さや人間としての弱さを素直に認めて受容できるようになる。一方で、自らの行動に対して素直に反省し、生き方を考えることは、大切だと感じていても、実現することは難しいと感じる。人間の弱さを認めながら、それを乗り越えてよりよく生きようとすることのよさについて、教師が生徒と共に考える姿勢を大切にすることが求められる。

授業の終末の場面で、ある生徒が、「自分のことは悩めばいい。自分に誠実に行動することが大切」と意見を述べ、それに対して生徒が「自分がしてきたことを超えるぐらい恩返しをすればいい」と意見を述べるなど、「責任ある行動」について、2人で議論している姿が見られた。

このような生徒同士が道徳的行為の難しさについて語り合ったり、逆に、生徒たちが見聞きした素晴らしい道徳的行為を出し合ったりする中で、弱さを乗り越えてよりよく生きようと考えを

深めさせることができるのではないかと考える。

